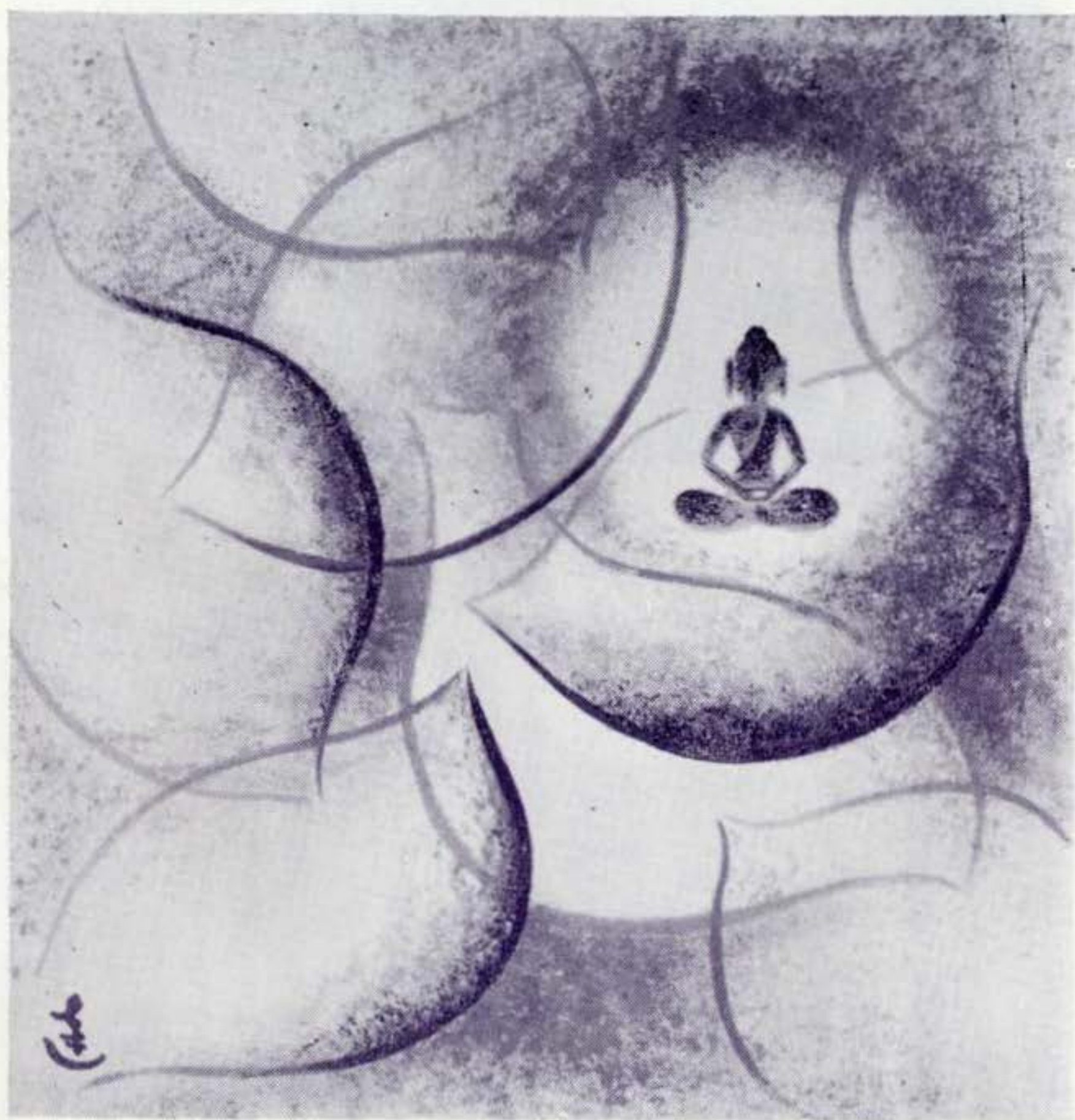


浄土

九月号



◆ 彼岸特集

法然上人鑽仰会

昭和十月五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四月四月二十八日 運輸省 (特別授受記録誌第三五二号)
昭和四十一年八月二十五日 印刷 昭和四十一年 九月一日 発行

第三十二卷

第九号

真実の怒りを見つめよう

波夷羅大将（鎌倉時代・木造）

興福寺蔵



人間のいかりには憎悪がともなう。そればかりではなく、互いに不愉快な気持ちに浸って、心に断層ができ、意思の通じあわない世界が展開してくるものである。それに対し、いかれる仏はその底に慈悲を内包している、と説かれてきたし、説いてきてもいる。しかし、慈悲を秘めた仏のいかりという言葉にあまえずぎていたようである。仏の救いを心の底で当然のものと期待しながら、いかりの真実なありかたを追及することもなく、なれてしまった人間のすがたがここにある。宗教の世界に慣れきった恐ろしさが、自己のはからいが、仏の真実の姿を見失なっているのである。仏の怒りはそういう人間のなれやあまえに向けられている性質のものではないか。

柔和な薬師如来を囲んで、いかりと雄々しさを込めて、力強く、炯々たる眼を見開いて、人間の心中の奥底を凝視している十二神将。その一神たる波夷羅大将は薬師の大いなる願いのひとつを受け持ちながらも、降魔の剣を今こそまさにはらわれようとする怒りを、末世の今日のために示しているようである。鎌倉時代のたくましさをそのままに、厳然と怒りを発するこの像の意味を、初心に受けとるべきであろう。

（石上善応）



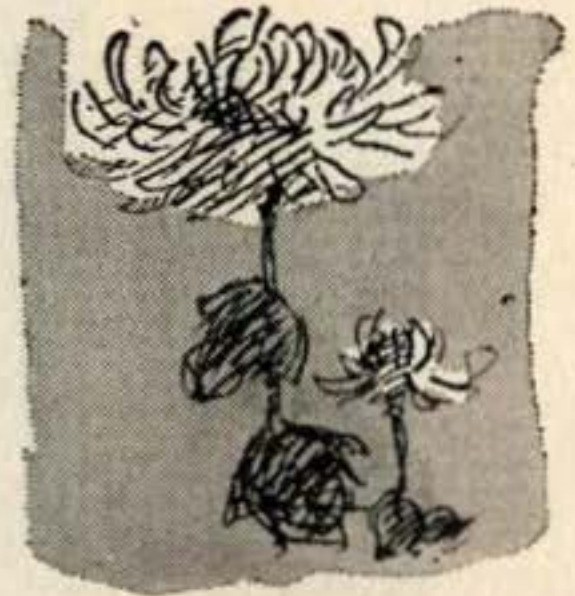
好まずして、自然に虚仮ならんは、
往生の障にあらず。

法然上人御法語

— 目 次 —

表紙「散 華」松濤達文画

随想	須知幸太郎 一ノ瀬路子.....(2)
彼岸特集	
彼岸に寄せて	藤吉 慈海.....(4)
光の国へ.....	山口 諦存.....(8)
彼岸の心.....	伊藤 真徹.....(10)
— . — . — . — . —	
ベトナムに祈る(2)	小布施弘学.....(14)
やすらかな死	遠藤 随了.....(18)
お経の話 三心は社会のころ	村瀬 秀雄.....(20)
— . — . — . — . —	
無媒随録	須藤 隆仙.....(23)
現代語訳 歎仏偈	吉田 定久.....(27)
路頭に迷う婦人 創価学会のころ	(24)
質問帳 墓参について	(26)
ご法語をいただく	(31)
人生相談 家庭における親と子の在り方	(32)
信仰の手引 はすの花	(33)
連続 読 皆さんの法然さま・耳四郎の入信.....	高橋 良和.....(28)



お経の功德

須知幸太郎

第二次世界大戦従軍中、私の体験談二題を披露して読者諸賢に仏の功德の無量無辺なる事実を紹介致しますよう。

一、正信偈が身代りとなる。

私が指揮官として十三隻より成る一船団を率いて、昭和十八年十一月二十三日高雄港を発、サイゴンに向って仏印（今の南北ベトナム）の東岸沖を南下中、同月二十八日午前四

て居たに違いない。因縁とは不思議なものである。

二、般若心経の功德

昭和十九年五月十日同九月十五日迄、浜名海兵団長として勤務中の出来事を紹介致しますよう。

曩に西貢勤務中皆様も御承知の通り安南は仏教国であるが同地在住の黄仲訓先生より縁あって同氏揮毫になる般若心経の掛軸を頂いたので、爾来これを身を離さず携え今回も団長室に掲揚して居った。当時は我国敗戦の色も漸次濃く敵潜水艦も遠州灘迄侵入して我艦船を襲撃する事も多かった。昭和十九年八月十五日敵潜から発射した魚雷が不発のまま海岸に打ち上げられたので、これを団内に収容して練兵場で解体作業中誤って魚雷頭部の炸薬室が大音響と共に爆発、爆波は四方に広がり構築物を破壊、遠く二キロ米も離れた村の小学校の窓ガラス迄も破損した。其時私は団内を巡視中であつたが此爆煙を見て直に現場に到って視察した。死者、負傷者等数名出したが団長室に帰って見ると前記心経の掛軸と

信念を堅持し、良いにつけ、悪いにつけ仏の慈恩として仏に感謝するものであります。良ければ一段と励み、悪ければ精進の不足を思つて改心に努めつつあります。電車の中で人から席を譲られたら、席に着いて心の中で般若心経を念誦し、歩いて居ってアア危いと思つた時は歩きながら心経を唱える様にして居ます。僅二六二文字、一分か二分間で済みます。かくて仏に感謝する様心掛けて居ります。が凡夫の悲しさまだまだ思う様実行の出来ないののに恥ち入る次第であります。

生きること

一ノ瀬路子

国民一億総タレント化、などといわれております昨今、確かにテレビ等を見ておきますと、次々に新人タレントが脚光をあびるかと思えば、一方では消えて行くといった現象が如実にあらわれていると思います。

その中、昨年頃より「生活がかかっている

時十五分私の乗船シドニー丸船尾に敵潜水艦より発射せる魚雷命中、船は見る見る内に船尾から沈み初めた、私は艦橋（船を指揮する為最上部に在る小甲板）に在って乗員に避退命令を出し出来るだけ人命救助の処置、重要書類の始末をなす様指図したので、我が為す事終れりと艦橋に立ったまま船と共に海中に沈んで行った。この時の有様は今猶アリアリと眼前に浮んで忘れる事は出来ない、数分後我身は海面に浮き上り幸に傍に漂う一空樽にすがりつき漂流する事四時間、あたりに人影もなかったが幸に午前八時頃味方護衛艦に救いあげられた。

その時死んで居れば今はこの世にないと同じ時に、あれで死ねば死はいとも楽なものであると感じた次第である。出征に際し私は常に読誦して居った、正信偈を携帯して家を出て船中で閑がある毎に拝読して航海中心の慰として居ったのですが、船室に残したその経典は船と共に沈んだ。これはこの尊い偈が私の身代りになったものと唯々独り感謝して居るもし私が機関室とか船室とかに居れば戦死し

今一つ山水画の軸を並揚しおいた二幅の内山水画は爆波の為吹き落され破損して居るが、心経軸は厳然と懸り何の異状も認めなかった心経の功力で爆波を寄せつけなかったと感じた。この現象は科学的に説明すれば爆発による空気振動伝達の関係で途中障害物の為心経の方へは波及しなかったので若しアベコベに掛けてあれば、心経の方がやられたに違いないと云わん。然し因縁関係から申せば、波及しない方に掛けたのが凡人では知る事の出来ない因縁が存在して居る、これ心経の功德の宏大無辺なるを物語るのである。

三、結び

万物は因縁より生ず、因縁を知る事は仏教を知る事であると高僧智識は説いて居られる因から直に果が生ずるのではなく、因に縁が降りかかって果が生れる、前述二題に付ても船が沈む因に正信偈の仏恩縁が和合して生命を救われる結果が生ずる。又爆発の因があつたが般若心経の功德という縁がこの爆波を退散した結果と恐察する次第であります。

爾来私は吉凶禍福総て因縁より生ずるとの

からね」の一言をひっさげて登場した東京ほん太もその中の一人と思います。彼自身長い苦しい修行時代を過て現在に至っているので聴視者には彼の身体からあふれ出るバイタリティに共感がもてるためでしょうか、老若問わず仲々の人気です。あの親しみやすい仕草から飛び出す「生活がかかっているからね」の一言はどの世界で生活する人々にも共通性のあることばとして受取れていると思う。

私は彼自身どういう意図をもって、この一言を考え出したかは知りませんが、私はこの一言を聞く度に、次の様に思えてならないのです。この一言の中には、生活の「生」は「生きること」「生命」であり、「活」は「活動・活躍」という意^{こころ}があると思います。そして生命を活動活躍させるところに人間本来の使命があるのではないのでしょうか。一見当り前のことのようにですが、今日の様に人が機械文明の一部分としての生活を余儀なくされつつあるといわれている昨今この一言を唯笑いの一材料として簡単に考えてはならないと思うのです。

彼岸に寄せて

藤吉 慈海

(花園大学教授)



南、火の国、有明の海に近いといっても、海岸まで三里位はある佐賀平野のまんなかになれ育った私などは、彼岸といっても、鮮かな印象にのこる思い出はない。

それでも、小学校への行き帰りに、道端に咲いていた真赤な曼殊沙華を見つけて、「あッ彼岸花だ!」とかけよったことがある。一緒にいた悪童が、

「とってはならんぞ、それは精霊花だゾ」

とどなったので、おそろしくなつて、じっと立ったまま眺めていたが、その横に立っていた古びた墓石が何かを語りかけるようで、こわくなり急いで走り去ったことがある。

この夏、帰省してみると、そのあたりもすっかり変ってし

まって、新らしい家が建ち、昔の俵はなくなっていた。日本の農村も急激に変化している、この数年間に、日本の底辺がすっかり近代化しつつあることを、まざまざと見せつけられる思いがした。

それでも佐賀から汽車に乗り京都へ帰るとき、列車は青田の中を走る。クリークの多い佐賀平野であるが、列車の窓の下に青々とした蓮の池があり、真白い蓮華の花が咲いていた。

故里は青田の中のクリークに、白い蓮華の花咲くところと列車の中のつれづれに歌をつくってみた。どこかで聞いたような歌だと思いながら、うつらうつらしていると、「白

い蓮華の花咲くところ」というのが、岡本かの子か与謝野晶子か忘れたが、有名な女流歌人の、地獄極楽を歌った一連の歌にあったような気がする。そうすると、めったに作ったことのないこの僕の名歌も、「わが家は都の辰巳鹿ぞ住む」という有名な歌と白か赤か忘れたか、「蓮華の花咲くところ」という女流歌人の歌のヘウセツになりかねない、やれやれと思っていると、今度は別のアイデアが湧いた。

うっかりこの歌をハガキに書いて江見にいる甥の増木浩明に送ったら、口の悪い若僧が、「故里は寺のまわりのドブ池に食用蛙の夜鳴くところ」とヤユしてくるかも知れぬと思つて、ニヤツと一人で笑った。本当に二晩ほど、自分の生まれ育った寺の座敷に泊まったが、二晩とも、いつのころから住みついたのか、夜になると食用蛙が大きな声で鳴くのである。はじめ何の声かわからなかったが、食用蛙の鳴声だという。牛のような鳴き声である。食糧難から戦時中に食用蛙を育てたことがあったが、それがどこからか逃げて来たのでもあろうか。睡眠をさまたげる位の大きな鳴き声である。

また、うつらうつらしていると鳥栖近くになった。このあたりは全く近代工業地帯に変貌している。中学生の頃、行軍で歩きまわった山野も、いろいろの工場に変わり、「山形改まる」といった方が適切な位の変りかたである。

この夏、佐賀市元町の称念寺で浄土宗教学研究会の集まりがあり、「日本の底辺と浄土宗」という話をした。東南アジアの農村と日本の農村をくらべると雲泥の相違がある。私はこの数年来、東南アジアの諸国を巡って、その底辺にある人々の生活を見てきたが、日本のそれと比較して、大変なちがいが感ぜられる。ことにこの数年間の日本の近代化の早さはその底辺にまで浸透して来ている。そのような変貌をとげつつある日本の、底辺にある人々の精神状況をつかまないうで、教化をしようとしてもピントはずれになりはしないかというのが、話の主旨であった。若い宗侶といっても、もう中堅の方々ばかりであったが、うなずいて聴いて下さった。

その翌日、武雄市西福寺で催された浄土宗教学高等講習会に出講した。ここは宗門の先輩の方々もたくさんいられたが知恩院浄土宗学研究所で企画した「往生浄土の理解と表現」という「浄土シリーズ」について話をした。現在の浄土宗において、「往生浄土」ということが、どのように理解され、どのように説かれているか、先ずその実態をつかむために、宗内の宗侶のなかから百二十五名をえらび、二千字以内で、解答をよせて頂くことにした。そして、それを分析して、新しい宗学研究の方法をたてようというのである。実際、その時までに六十五名の解答が集まっていたので、それを分類し

てその内容を紹介しながら、私の感じていることを率直にのべさせていただいた。かなり反響があったことは、その後の質問からも察せられた。しかし一般の浄土宗侶は、いまこのような問題について真面目に考えているであろうかと反問してみると、一沫の淋しさを禁じ得なかった。

講義がすんで、私は甥でもあり弟子でもある増木浩明の運転する車で、称念寺の西村瑞純君と共に、久々に古湯までドライブした。川上川をさかのぼること約三十分にして、古湯温泉がある。むかしは一、二軒しかなかった温泉宿が、いまは数十軒に増えている。あららぎの斎藤茂吉先生が若い頃、病氣療養に来たところで、その歌碑も建っているとか。宿の女中さんにきくと、佐賀よりも山を越えて博多からくるお客さんが多いそうである。古湯は私にとっては懐かしい思い出の町である。佐賀高等学校の学生だった頃、講演部のキャンプで、この町に来て、川岸にテントをはり一夜を歌ったり語ったりして楽しく明かしたが、その時、同行された岩本秀雄先生は今はいらぬ。その時「藤吉君は将来仏教界で活躍するだろうが、求道心を忘れないように。政治家みたいな活動家がいるが、私はあれが一番嫌いだ」とおっしゃったことが懐かしく思い出される。先生は最後まで孤独な求道者であった。佐賀高校から松江高校に移りドイツ語を教えてい

られたが、仏教哲学者としても、しっかりした方であった。西田幾多郎、波多野精一等の傑出した先生方につき宗教哲学を専攻していられたから、当時の私たちには一番影響を与えた先生であった。古湯のキャンプでも、華嚴や天台の哲学の話が出たし、道元の正法眼蔵の話も出た。翌年、先生と共に上海から南京、蘇州、杭州と江南の仏教遺跡をめぐり、ついに寧波に出て、普陀山や天童山、雪竇山と、道元禪師ゆかりの支那寺を巡ったが、その計画をたてたのも、この古湯のキャンプの夜であった。

これらの寺々では、出された参詣者名簿に、鈴木大拙、藤井草宣等の名が出て来て懐かしかったが、その鈴木先生も去る七月十二日九十八才の高令でとうとうなくなられた。

武雄の講演会でも、私は鈴木先生の葬儀に参列した時の所感を語った。

七月十三日夕方、北鎌倉の東慶寺につくと、丁度、先生の柩が松岡文庫からおろされてお通夜にあてられていた東慶寺の本堂に移されるところであった。私は同行した北原隆太郎（白秋の長男）君や玉川学園の今井富士夫氏と共に先生の柩をまっていた。東慶寺御住職はじめ小堀宗拍、古田紹欽氏等先生に親しかった者たちだけで舍利礼文をあげ、柩の蓋をあけて、最後の対面をした。私も先生のお顔を近々と拝して合

掌した。先生の死顔は真白であった。頭に縫合したあとのようなすじが見えた。頭脳を解剖したのであろうか。晩年、先生の秘書をしていた岡村美穂子さんが泣きながら、白い紙包みを先生の胸のあたりに置いて、蓋はしめられた。祭壇の上に柩をのせ、飾りつけがなされた。天皇陛下はじめ各国大使等からの供物や花輪が供えられ、先生の横顔をとった大きな写真が中央におかれた。夜七時から円覚寺管長朝比奈宗源老師の導師で通夜の読経がなされた。その夜は、ひっきりなしに参詣者があったようである。

翌日午前十時から東慶寺の本堂で出光さんを葬儀委員長とする臨済宗による葬儀がなされた。導師は朝比奈老師、左右には古川大航妙心寺派管長をはじめ柴山全慶南禅寺派管長、正眼寺僧堂の梶浦逸外老師等、禅界の長老や学士院会員辻直四郎博士をはじめとする学界の碩学や門弟遺族で一杯であった。私が最も印象的だったのは朝比奈老師の香語であった。よくききとれなかったが、私の耳の底にのこっているのは、

堂々たる一無位の真人

願輪に鞭うつ九十五年

時いたって何処に向ってか去らんと欲す……………

という語であった。本当に鈴木大拙先生こそは、「堂々たる一無位の真人」というにふさわしい方であった。九十五年

間、ひたすらに道を求めて、願輪にむちうってこられたのである。テレビで増谷文雄先生も語っていられたが、先生は親友西田幾多郎先生のお書きになった「一日作さざれば一日喰はず」の禅語墨蹟を自分の部屋に掛けて、最後まで勉強していられたそうである。その先生が、本当に死ぬことを忘れていたような先生が、突如として一体どこへ行かれたのであるうか。香語は玄奘三蔵にも比すべき方であった等とのべていたが、そんなことはどうでもよい。先生は「わしは死んだら極楽でなく地獄へ行きたい、そして地獄で苦んでるものを救わなけりゃ！」と申し立ていられたから、今頃は地獄におちた人々を見ながら、「何だお前も来ていたのか、こいつあたまらん」と両手で頭をおさえていられるであろう。

也風流庵大拙居士という位牌もまたおもしろい。「風流ならざるところまた風流」というか、先生は平凡な人であり、世にいう風流人ではなかった。しかし、その平凡で何の風情もないところに却って風流さがあった。先生自身そこをねらって生きて来られたようである。

松岡文庫に登ってみると、柩のあった部屋に、

よしあしのなかにこそあれ夕すずみ

だいせつ

という軸がかかっていた。私はアメリカのハーバード大学

で半年間先生と同じホテルに住んだが、先生は、こんな句をつくったといって話して下さった。「人はよしあしをはなれて一人夕涼みというが、そうじゃない。よしあしのなかにこそあれ夕涼みでなくちやいかんよな」と。煩惱即菩提という

か、よしあしの分別のなかにありながら、そこにそのまま分別をこえる涼しい悟りの境地を見い出さねばならぬというのでもあろうか。

光の国へ

山口 諦存

(総本山知恩院布教師)



朝夕ようやく新涼を覚える九月となりました。残暑にあえぎながら、どれほどこの頃を待ったことでありましょう。

秋来ぬと目にはさやかに見えねども

風の音にぞおどろかれぬる

(藤原 敏行)

軒端にすだく虫の音を聞きながら、灯下に秋の気配をしみ

じみ思う時、あれほど切なく春の日を待ちながら空しく花を見、萌え出でた新緑薫風の頃も過ぎ、酷暑に処するところもなくただ暑さをかこつ日々ばかりであって、いたずらに秋風にさらされたわたくしを見出して、さていつの間に秋の頃となってしまったのであろうかと、秋風に驚いてやがてきびしい冬と対決しなければならぬ身を鞭うつのでありますが、

飛花落葉に仏法を見ることが知らず、日々を「共に不急の事を諍（あらそ）う」とのおいしましめに、深く教えられるばかりであります。

昔、中国宋代の徽宗皇帝が金山寺の楼上から、揚子江を見ますと無数の舟が往来し又、舷を並べて停泊していました。

この光景を見た皇帝は治政がよく行われているためであると満足げに眺めながら、住持の薰伯和尚に「揚子江に浮ぶ舟は非常に多いが、一体どれほどの舟だろうか」と、たずねました。すると和尚はすかさずに「ただ二隻あるだけでございます」と答えました。皇帝は「二隻とはおかしい」と、問いかけで「ございました」と、答えたと伝えられていますが、揚子江上の無数の舟も悟道に立っていいますならば、名誉を追う舟と、利欲を求める舟の二隻だけであるとは全くそのものズバリでありましてまことに絶妙であります。

仏道をきわめていない人には、無数の舟であり、仏道を知りつくした人には、わずかに二隻の舟と見えるところに、大きなへだたりのあることを思うべきでありましょう。

名利的舟、利養の舟はそのままわたくしのことでありまして、貪りいかり愚痴の煩惱が常に頭をもたげてきまして、人情は薄く急がねばならないめざめの世界をねがわず、急いで

はならない欲にまどわされて、諍いに日をついやしているのであります。

名誉と利益の犬となって走り廻って、ほんとうの幸福を求めようとしてもしないくらしの中に、春と秋の最も快適なころを七日間、めざめの日暮しをする週間として浄土の世界を思う生活態度を定められていますことは、仏道修行に志す最もよい機会でもあります。

ある日の、お釈迦さまはガンジスの河岸に沿った村で弟子たちのために、法をとられました。

弟子たちよ、昔マガダ国に、一人の愚かな牛飼いがいた。雨期も終わったので彼は、牛の群れをつれてこのガンジスの河を渡ろうとしたが、どこが浅いか深いかもしらべず、渡し場でないとところを、牛の群れを渡そうとしたので、牛はみな水に溺れて死んでしまった。ところが一人の賢い牛飼いは同じ頃牛の群れをつれて、この河を渡ろうとしたが、まずこの岸もまた向う岸もよくしらべ、よい渡し場を見つけて牛の群れを渡そうとした。

まず最初には、牛の群れの中からもっとも強い牛たちを流れに入れて、安全に向う岸に渡した。次ぎには比較的強くて馴らされた牛を流れに入れ、これも無事に彼の岸に渡すことができた。最後に残った力の弱い小牛たちは彼の岸へ渡りつ

いている母牛たちの鳴き声にひかれ、はげまされて、懸命に泳ぎ無事に流れを横切って、母牛たちの待つ岸につくことができ、牛飼は一頭の牛さえも失うことなく、目的の彼の岸に着くことができた。

(仏教百話)

この卑近な話は、眼前に流れるガンジスの河を見ながら、現実の人間生活をこの岸とし、理想の人間生活をかの岸として、どうして此岸から彼岸へ渡るのかの教えをしめされたものであります。

彼岸の心

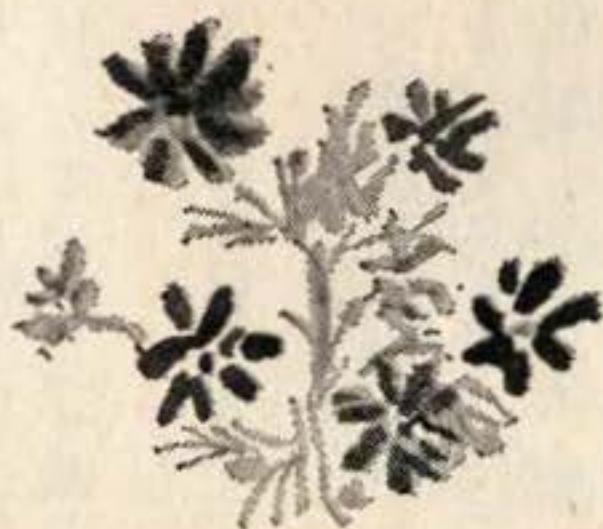
伊藤 真徹

(仏教大学教授)

真昼の蟬時雨、朝夕の薄暗い頃にも鳴き続けた法師蟬の合奏から、こおろぎ、松虫、鈴虫、くつわ虫の演奏に交替するうちに季節のうつろいが感ぜられる。雄大な而も遠い遙かな

彼岸・到彼岸ということばは、理想の境地、めざめの世界、仏さまによって完成せられた浄土をいうのであります。その浄土は仏が凡夫を救わねばやまないという大慈悲によって、よろこんで自分を捨て、捨てることによって仏となつて自分を生かし、浄土を構えられたのでありまして、すべてが大慈悲の美しさに輝く光の世界であります。

この光の世界に凡夫をみちびくために、念仏の道を仏はすすめられたのであります。



思いに誘われる天の川や、鰯雲のたたずまいにも秋の忍びやりが思われ、咲き乱れる千草の花、真赤に彩る曼珠沙華の土堤を歩んで彼岸を膚に偲ぶことが出来る。

寒さに耐え、暑さを凌ぎ得た季節の喜びを味い得られるのが、春と秋の彼岸である。

暑さ寒さを、湖辺のキャンプに、山岳のスキーに青春をエンジョイする若者はいざ知らず、しかしそれ等の若者を含めて、己がじし世の生業に寒暑を厭わず全力を尽し得た者の喜びは、益々努力と精進の心を弥益す彼岸の頃である。

彼岸とは読んで字の如く、季節的には冬と夏の痛苦の果てに迎える彼の岸であり、生産のうえでは努力の末に来る喜びの彼の岸である。

仏教では生死の不安と絶望、破滅と自失の断崖に彷徨う現実世界を此岸とするに対して、涅槃の永遠に変らぬ、苦しみのない、自由で他に拘束されぬ、煩惱の汚れない境地を彼岸と言うのである。この意味からすると、彼岸とは彼岸に到るといふのがその内容とせられるのであるが、一般には略して彼岸といい、春分、秋分の日を中心として、前後三日間の七日を彼岸会と称して、彼岸の目的目指して、発展する様に反省と修養に自策自励する信仰週間である。

この春秋二季の信仰運動は、日本独自のものであって、インドにも中国にも見られず、日本でも平安時代以前には、春秋二季と定まった年中行事としては行われていなかった様である。『類聚三代格』に延暦二十五年（八〇六）三月の太政官

符があるが、それに、早良親王の奉為に金剛般若経を諸国の国分寺の僧をして転読せしめられたもので、その文中に『宜しくすなわち国分の僧、春秋二仲の月に、別して七日、心を存して読み奉る』べきことが定められている。

この春秋二季のつとめが、時代の流れと共に、国民生活の中に沈澱して、切放すことの出来ない民間習俗となるが、この二季に自らの修養にいそしんだのは九条兼実である。兼実は夙に恒例の七日念仏と称して、春秋二回口称の念仏を相続したが、その期間については、その日記『玉葉』の中に、「彼岸の間、修するところの念誦、今夜結願しおわる」とあるので彼岸七日間がそれに当てられたことが知られる。

九条兼実は身は関白の尊い身でありながら墨染の聖、法然上人と念仏によって結ばれた親しい間柄であることは、世間に周知せられている。文治五年（一一八九）四十一歳の兼実は、八月一日法然上人を招聘して、浄土の法門と往生業について教えを受け、上人から極楽の教主阿弥陀仏と、その国土に生きることを確約する念仏について保証せられ、本当に心の安らぎを得ることが出来た。この年の八月の恒例念仏は八日早朝から十四日の早曉に終わっているが、兼実は先ず七日夜九条堂に渡り、八日法然上人を招いて授戒している。上人との出会い以後の兼実は、一向専修の身となり、只管その教えを

仰いだことは、兼実の日記の上から十分に伺い知ることが出来る。

九条兼実の請いによって、上人が筆を染めた『選択本願念仏』には、浄土の要義が余すところなく納められている。その三心章には善導大師の『観經疏』散善義に述べられている二河白道の譬喩が引かれている。浄土宗信者の多くはこの譬は一度や二度は耳にせられたことであろうが、兼実もその意味するところの深義を再三玩味せられたことである。

その大要は、西に向って千里の行程についた旅人は、忽ち中途において二河に遭遇した。一は火の河で南にあり、一は水の河で北にある。この二河の広さは百米、各々深くして底なく、南北共にその果でもない。正しく水火の二河の中間に一の白道はあれども、その広さは足幅にも及ばない。この道は東岸から西岸に達しているが、水の波、火の焰、交互に來り襲うて、道を浸し、又道を焦して暫らくも止む時がない。旅人はこの曠野に來って、孤影人影なく、多くの群賊惡獸は挙って來り毒害しようとした。難を恐れて進まんとすれば、水火の二河に墮ちて死することは明らかであり、進むも死、退くも死が待つのみ、の窮地に立った旅人は、何れの途を選ぶも死を免れずとせば、寧ろこの道を進んで西に向わん、既に道あるからには渡ることを得べしと決意した。時に東岸に

「ただ一筋にこの道を尋ねて行け、必ず死の難はない」と勧める声あり。又西岸の上に人あり、「一心正念に直ちに來れわれ能く汝を護らん」と喚び声がする。旅人は行け來れの声に、疑惑も怯懦も怠惰の心も消去って、行くこと暫し、東岸の群賊の甘言に耳を傾けず、一心に直ちに進んでいくに、須臾にして西岸に到り、諸難を離れて、善友と慶び睦び楽しむことを得たというのが、その梗概である。

この現実世界の東岸に対して、弥陀の極樂浄土を西岸とし東岸の此岸に対して西岸を彼岸とする。西岸に至る間の火と水の河、およびその中間の狭い道を、人間の迷いと往生を願う清浄な心にたとえたものである。

彼岸に到る白道の御法を教え給うた善導大師、その教えをわれ等に示された法然上人に対し、奉謝と感激の「入深いものがある。悟りを求める人に示された教は、『無量寿經』には一切の善本、みな彼岸に至るとあって、善本を集積するところが条件とせられている。この善本を要約すれば、六種の波羅蜜多（到彼岸）である。施しをし、戒律を守り、迫害に耐え忍び、他の五つの徳目を撓まず弛まず実践し、心を動揺せず、眞実な智慧をひらきあらわすことである。しかしこの何れも現実の自己を内省するとき、貪りと放縱、自尊と怠惰、散乱と蒙昧の現存在の人間は不適格であり、永く閉ざれて開

かれぬ仏の門と言わなければならない。この聖道門きとりのみち以外に、われ等の分際に叶うた法門があるかとの探索が、法然上人の生涯をかけられた課題であった。

しかし善導大師の『観経疏』散善義の文によって、従来の疑問は解消することを得た。その時の感激を上人の伝記の一種『十六門記』には

一心専念弥陀名号の文に至て善導の元意こころを得たり。歡喜の余あまうに聞人なかりしかども予が如の下機おろかもの行法は、阿弥陀仏の法藏因位の昔かねて定置るるをやと、高声に唱て感悦隨に徹り、落涙千行なりき。

と、上人の言葉としてその心境が表現せられているが、決して過大描写でないことは事実である。

聖道門きとりのみちの教えでは程遠い世界も、善導法然両上人によって開かれた彼岸は身近かである。ただ一筋に南無阿弥陀仏と称名することによって、到ることの出来る西の岸である。

お知らせ

来る十月一日より当事務所の住所表示が改訂となります。十月以降は新住所名にて御連絡のほど、お願い申しあげます。

東京都千代田区飯田橋一丁目十一番六号

法然上人鑽仰会

藤井実応著

生きる歩み

文庫版
二〇〇五
価
〒

十五年にわたるハガキ通信集

著者の信仰生活の記録

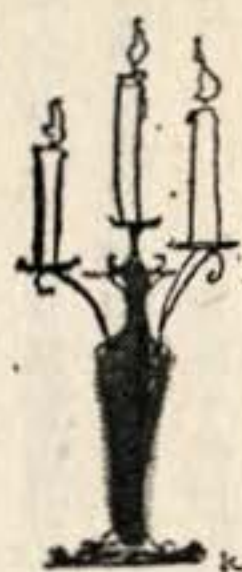
揭示伝道、文書伝道、布教の参考資料

電車の中でも二分、三分の暇にも手軽に読める。

病人の見舞、法要のひきものにも適す。

申込 愛知県小坂井局区内

藤井実応



ベトナムに祈る (二)

小布施弘学

四

今日のベトナム問題は、遠くこの辺から発生したものである。その後、ベトナム内外の状況が日本にとって不利になってきたため、昭和二十年三月九日（一九四五）日本軍はクーデターをおこして、フランス人を追放し、インドシナを名実共に支配下においたのである。

これが明号作戦または三、九事件である。

私は出征のとき浄土宗管長よりおくられた紫地に宗紋のついた陣中袈裟を、軍衣の下に佩用し、父のかたみの日課珠数を、左の二の腕に巻いて戦斗に参加した。

いざ、戦斗に突入すれば、生の執着も死の恐怖も全くない。

明鏡止水のような気持であった。勝敗は兎に角として、祖国の安泰と、同胞の幸福のために殉じようとする、崇高な心には、生死の煩いはなく無我の境地であった。

これは丁度、浄土に往生せんとする崇高なる確信をもてば生死超越して安心立命を得られることと同様である。

やがて翌日、三月十日陸軍記念日の正午、日本軍の圧倒的な勝利によって戦いは終わった。

敗戦後の状態は、いずれの国でも同様であって、食を求め避難民がハノイの市街に殺到した。乞食のようにやせ衰えたベトナム人が、炎のように燃える舗道に卒倒して息絶える。と、それを待っていたかのように、避難民達が、餓死者の衣

服と携行物を奪い合うのである。

丸裸にされた老若男女の屍体が毎日ハノイのメンストリートに、あたかも馬鈴薯をころがしたように、幾十幾百となく散在していたのである。

既に息絶えた母の、うすっぺらな乳房にすがって泣き叫ぶ赤ん坊も、見る見るうちに死んでいくのである。ところは灼熱の路上である。しばらくすると腐敗しはじめ、パチンコ玉のような大きい蠅がむらがる。

全くこの世の地獄であった。

念仏をつぶやきながら市内を巡察していた私の眼にパイプを片手に屍体の前にかがみこんで、彼等の昇天を祈って歩いているフランス人の牧師の姿が映った、賽ノ原の地藏菩薩のように思われて合掌せずにはおれなかった。

日本軍のトラックが市内を巡廻して、路上から收容してきた、おびただしい死体を、ハノイ郊外に掘られた大きな穴に合葬したのである。

穴のそばで回向している私は、投げこまれる死体の音を、聞くまいと声をはりあげて誦経念仏した。この世の中に、こんな恐ろしい音と哀れな姿があるであろうか。

屍臭のただようハノイの夜が訪れてくると、盗みが横行し夜の女が町中に群り歩くのである。曾って裕福であったであ

ろう娘が、夜目にも鮮やかな純白の安南服をひるがえし、またボロをようやく身にまとった乞食女達が、飢餓から遁れんとして、命がけで春をひさぐのである。

夜の町角で若い女の泣き叫ぶ声が聞える。それは未だ穢れを知らぬ十二、三才のわが娘を売りに歩く母親の姿であった。

「お母さん！それだけは勘忍して！」と、いやがる娘の声

が、いまなお私の耳朶に悪夢のように残っている。すべてを売り尽して餓死寸前の家族を救うものは、このいたけない娘を売り歩く以外に生きる道が残されていなかった。たのである。全く正視出来ない光景である。

これらはただ二十年前の昔話でなく、今ベトナム各地に展開されている地獄絵である。

五

昭和二十年（一九四五）八月十五日、日本軍が無条件降伏をするや、安南人の武装的大衆が蜂起して、ベトナム独立運動のデモが、昼夜分たず繰りひろげられたのである。

中国の支配から引続きフランスの植民地となって永い間、征服されていた安南人が、日本の敗戦を契機に、ベトナム人のベトナムを建設せんと燃ゆるが如き闘志で、紅の旗を黄風になびかせたのである。

中国軍に武装解除をさせられた私達は、今までいた司令部

に抑留されて、このデモ隊を見守っていた。武器のない彼等は、竹槍をかざし、あらめる刃物や農具を手にして、外国の支配に反対し、独立を叫んだのである。

或時の暴動が、南寧方面から入って来た程度の低い中国軍では手に負えなかった。そこで要請をうけた日本軍は、その鎮圧に出動したところ、彼等は敗れ去った日本人の指導に、素直に従ったのである。

インドシナは、曾って平和進駐をしたところであつたため現地人に暴力を振わなかったことがベトナム人に好感をもたれた所以である。従って戦争に敗れた日本人に同情的であつて、彼等のもつ憎しみは、専ら中国とフランスに向けられていた。

人には情をかけておかなければならない。

インドシナ北部で終戦を迎えた日本軍は復員船の来るのを待つためハノイの外港であるハイフォンの近くのホンゲイという所で中国軍監視のもとに、祖国より迎への船の来るまで農、畜、漁に分れて不自由な抑留生活を始めたのである。

ハノイの司令部の勤務を終えた私は、その抑留地へ唯一人で帰って行かなければならなかった。

道中おびただしいデモ隊に出合う度毎に、私は生きた空がなかった。すれちがう瞬間に、彼等の一人が煽動したならば

私はたちまち撲り殺されてしまったであろう。

嗚呼、実に恐ろしかった！

丸腰の私は、戦々競々として合掌し、念仏をつぶやきながら歩かずにはいらなかった。仏教国に生きる安南人は、私の合掌の姿に対し、微かなほほえみを向けながら通り過ぎてくれたのである。

実に合掌ほど何ものにも怖れざる姿はない。それはみ仏の護念を頂くからである。

六

ひなた臭いバラバラな現地米と芹の塩汁で栄養失調になり抑留八ヶ月にして傷心空しく名古屋港に上陸（昭和二十一年四月）したのである。

思えば波濤を越えて、長い船旅であつた。

夢にも忘れることの出来なかった祖国の埠頭に、見せつけられたものは、アメリカ兵や黒人兵に抱かれて、私達の上陸を見物している日本の娘達であつた。

ああ、矢張りベトナムで見て来たことが、今の日本でも行われているのであろうかと、憂いつつ上陸したのである。

大阪港を出航したあの日に反して、今埠頭には、一人の同胞も見あたらない。帰って来てはいけなかった私達なのであろうか。

祖国の地を踏みながら生還の喜びが湧いてこない。それは親しき友を戦地に失って、われ一人生きのびて復員した、腹立たしさのためなのだろうか。

歲月流れて二十有余年。

戦いに敗れたことは耐えがたきものではあるが、その独立の早さと、復興の素晴しさは、やはり日本民族の優秀性によるものである。然し私達は太平ムードに酔って現実を見失ってはならない。

隣りの朝鮮は第二次世界大戦後、北緯四十八度線により、人為的に南北に分断され、北半部はソ連が、南半部はアメリカが占領し、やがておきた朝鮮戦争のあと、北に朝鮮民主主義共和国が、南に大韓民国が分立したのである。

朝鮮人は単一民族で、言語も習慣も同一である。然るに親兄弟が南北に別れて、往来も通信も出来ない現況は、朝鮮民族の悲劇である。同胞が互に殺し合った朝鮮戦争（一九五〇—一九五三）は、南北朝鮮を荒廃させ、数百万の犠牲者を出したのである。

今インドシナ全域にわたって、この悲劇がくりかえされ、血を血で洗うベトコンの泥沼戦争が、いつになったら終るのであるか。

他国の主義の犠牲となり、おどらされ、もみくちゃにされ

ているベトナム人は誠に気の毒な民族である。聖域として今日まで爆撃をひかえていた米国は、遂にハノイ、ハイフォン地区を襲ったのである。このほど来日したラスク長官は、石油貯蔵庫を破壊することによって、北からの浸透を弱めるためで、これ以上の拡大はしないと述べているが、益々戦局が、深刻さを加えて来たように思われるのである。

七

神出鬼没のベトコンの渦巻く中に、仏教弾圧に対抗する僧尼の恐ろしい焼身自殺、そして仏教徒による仏壇戦争を見たといふような悲しみに沈むものである。

同胞が炎に包まれて自殺していく姿を、号泣しながら合掌し、大切な仏壇まで街頭に持ち出してデモの具にしている安南人の心中はいかばかりであろう。

街頭の障害になる仏壇を、片隅にかたづける安南兵も仏教徒であるがため、先ず合掌してから仏壇に手をつける姿を見て、私は茲に話し合いの場と、解決の道がひそまれているような気がしてならない。

恐ろしい憶測ではあるが、もしも日本があゝの敗戦の時、イデオロギーの全く異なる両者によって占領され、日本の屋根ともしられる長野県あたり（北緯三十六度）に一線を画して日

本が東西に、分裂してしまつたらどうであらう、思うだに身の毛のゆだつことである。

今ベトナムではいつ果てるともなき戦争が続けられている同じアジアに生きる者として、和平の術とてなく拱手傍觀しておらねばならない、日本の現状に、強い義憤を感じずにはいられないのである。

せまい国土になつたとはいへ、今日のような繁栄と平穩に生きていけることを、心から感謝すると共に、率先して全世界の力を結集し、人間の優れた叡智を以って、彼等を救つてやらねばならない。

世界民族の共栄を願ひ、徒に主義の争いを止め、互に引きさがって考えて見る「退歩の工夫」が、今日最も緊要なことである。地球の重さより人間一個の生命の重きことを思い、仏性を殺し合はる罪惡の恐ろしさを痛感して、生の尊嚴にめざめなければならぬ。今それを逡巡するならば、仏意にさからひ、神の心に背くことになつて、人類の破滅は明らかである。仏教徒もキリスト教徒も、今こそ信仰としての決断を迫られてゐる。インドシナを離れて茲に幾年月、はるかにベトナムを偲び、親愛なる彼等に平安の訪れ速きことを、み仏に祈るものである。

やすらかな死

遠藤 随了

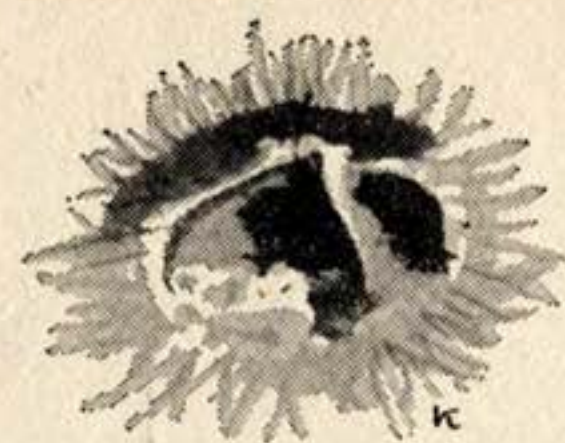
今から十三年前の十月二十二日、一日の寺務を終つて歸寺すると、「郷里から電報きているで」と、師匠の声に私は思わずハットしました。

「チチキトク」の電文に私はすぐにもとんで行きたいような氣持でした。然し氣を落付て翌朝歸郷する事にしました。「チチシス」と二度目の電報を受取つたのはそれから数時間後でした。翌朝汽車に乗つたものの若し今日お葬式だつたらどうしようかしらと不安な氣持で一ぱいでした。家へ着いた途端ひっそりしておるのでやれやれと思いました。先ず香華燈明で莊嚴された仏前に礼拝し、靜かに眠るように横たわる父の枕元に坐りました。その時私つくづく感じたのですが（さすがに信仰家の多い地方だけあるなあー）と思いました。悔みに来る人が一本ずつたてたのでしう

沢山の線香がたてられていました。

居合せた親類の人々に挨拶してから、母から思いがけない事を聞きました。「おちち（おちいさん）は結構な往生しなはった。おつとめしてて死なはったんや」。この言葉に私又びっくり、実は以前父が胃を悪くして永い間、苦しんだ事があって回復（かいふく）して元気になっておったのですが、若しや胃が再発して悪くなったのではないかと思っております。

話はこうなのです。なくなる二、三日前に三人（父と母弟の妻の房子）がいたとき、鳥（からす）がよく鳴いたので母が心にもない事を口走ったそうです。その頃、村の人が沢山なくなられたので「今度はおちちの番やな」とふと言ったそうです。何時もなら母のいう事には反撥する父も、その時には黙って笑っておったそうです。



すると房子が「おばちゃん、あほみたいな事いうて」といいかえしたので母は少々胸にムカッとしたが、ぐっとおさえて、「お前そういうけど一寸先は暗闇（くらやみ）やからな、明日の日もわからな

て田の稲刈に出たのです。それから二、二日して当日は私

用で父が遠方へ出かけるつもりでしたが、朝お寺の往職が来られ「今日は孝順さん、東京から墓参の人が来るからたのみます」といわれました。当時父は半俗半僧でお寺の役僧としてお手伝いさせて頂いてました。

丁度お昼頃にお寺の本堂でおつとめして、それからお墓でおつとめして、すんだ直後に「耳がヂャンヂャンして身体（からだ）がフラフラして来た」と言ってそのまま意識不明になりました。自宅へ連れて帰っても只もう「ぐうぐう」といびきをかいて寝ていたそうです。

母は仏壇から「リン」を持って来て、父の枕元で「チーンチー南無阿弥陀仏………」とくりかへし、どうか意識がもどりますように願ったのですがそのかいもなく永眠致しました。あとから考えると二、三日前に「今度はおちちの番やな」というたのはこれは「お阿弥陀様」が私に言わされたのや。と母は解釈しております。私は之れを聞いた時一文不知の一農人が法衣を身にまとい念珠を持って念仏の声の中に息を引取ったと私の欲目か知りませんがこんな結構な往生はないと存じます。翌年たおれた場所に墓を建てさせて頂いて今は永久にそこに眠っております。

(お 経 の 話) その九

— 觀無量寿經(三) —

三心は社会のこころ

村 瀬 秀 雄

他人にも真実を

続いて經典は次のように説いています。

「もし衆生ありて、彼の国に生ぜんと願せば三種の心をおこすべし。即ち往生す。何んらをか三となす。一には至誠心、二には深心、三には廻向発願心なり。三心を具するものは必ず彼の国に生ず」

もともとこの一句は、同じ凡夫の中にあつても、慈心があり、經典を誦誦し、修行にはげむという上善の人々に関して説かれたものですが、そんなことはどうでもよいことで、

この經典の中の大切な一句となっています。

それは何故かといえ、この一句に対して善導大師が大きな意義を見出したことに始まり法然上人が更に独自の見解を示したことによるのであります。

さてこの句は、第一に往生を願うというところが前提になっていて、次に三心を具足することが必要であるということです。

三心の第一は至誠心といって、真実な心であります。心の中も口にする言葉も肉体的な行動も、一切のものが真実ということであらう

抜かれていなければなりません。口ではお世辞をならべながら心の中で何を考えているかわからぬ人があります。また口では上手なことをいいながら、一向に実行しない人があります。このような人はお念仏の道には縁の薄い人であり、信仰の人になり得ない者であります。善導大師は

「外に賢善精進の相を現はし、内に虚偽を懐くことを得ざれ」

といっています。虚偽というのは、心の中と口とが一致しないこととあります。

それなら真実な心の持ち主は、どのようになるかといえ、まず自らは善を行うように努め悪を止めようとします。また自分ばかりでなく他人にもそのように仕向けることとなります。阿弥陀さまを心から信じ、合掌礼敬してお念仏を称えるようになります。このように自分が正しいものになると同時に、他人に対しても正しいことを勧めずにはいられないこととなります。このことを善導大師は「真実に二種あり。一には自利真実、二には利他真実なり」といっています。あくまで自分だけが正しければよい、自分だけが往生で

きればよいというのではなく、自分の喜びはそのまま他人にもそうさせたいと願う心となるところが大切な点であります。

われ凡夫なりの自覚

第二には深心であります。法然上人のお言葉（三部経釈の中に

「三心はまちまちにわかれたりといへども要をとり詮をえらんでこれをいへば、深心におさめたり」

とありますので、三心の中でも深心が大切であることがわかります。

深心とは深く信ずる心という意味ですが、何を深く信ずるのでしょうか。善導大師は、第一に「自身は現にこれ罪惡生死の凡夫」であることを深く信ずるのだと申されました。

そして第二には阿弥陀さまがすべての凡夫を救って下さるという三部経の教えを深く信ずるのであると申されました。このことについて法然上人は

「はじめにはわが身のほどを信じ、のちにはほとけの願を信ずるなり」

と申されています。

見ているばかりで手に取ることでできない

ものを高嶺の花といいます。宝石や貴金属等をはじめ、欲しくとも自分のものになし得ないものはいくらでもあります。まして自分が賢人でありたい、聖人でありたい、どんな修行にも耐えてゆきたいと思っても、それはできないことでもあります。信仰にいきようとす

る場合も同じであって、自分の能力、現在の実態を知らねばなりません。省みれば自分とは取柄のない一介の凡夫にすぎないことを知らされます。伝教大師すら「極狂の最澄」といわれたし、恵心僧都すら「頑愚の身」といわれました。そして善導大師が「自身は現にこれ罪惡生死の凡夫」といわれているのですから一般人は自分を何んといったらよいのかその言葉すらわからぬのがほんとのところで

す。凡夫であるからこそ阿弥陀さまを信仰するのであります。凡夫という自覚のないものがいかに反対しても、凡夫には阿弥陀さまを信仰するしか救われる道のないことをますますはつきり知るのであります。

善導大師のお言葉を次にあげておきます。

「観經の定散二善を説きて、ただ羣提希及び

仏自分は凡夫であるから阿弥陀さまを信ずるのであるから、お念仏を称えない者がいかに多く来て、往生できないと論じたとしても、それは自分の浄土信仰にとっては反って信念を確立するのに役立つ位のものであるということです。

衆生と共に往生を

第三には廻向發願心であります。これは極楽に往生するという目的に向って、「過去と現在の一切滅後の五濁、五苦等の一切の凡夫のために、証して生ずることを得とのたまへり。この因縁のために、われ今一心にこの仏教によりて決定して奉行す。たとひ汝等百千萬億あつて生ぜずというとも、ただわが往生の信心を増長し成就せん」の善根功德をふりむけて、その目的を達成するように願う心であります。

ここでもやまり善導大師の説明に注意したいと思ひます。即ち

「この自他所修の善根を以てことごとく、みな眞実深信の心中に廻向して彼の国に生ぜん」と願ふ」

とあります。さきに過去現在一切の善根

といいましたが、実は自分の善根ばかりでなく他人の善根をもともに目的に向つてふりむけるのであります。私が私の極樂往生のために貴方の善根をも一諸にふりむけるということは、私の善根をも貴方の極樂往生という目的のためにふりむけることであります。即ち私と貴方の善根を一つにして、私と貴方の極樂往生という目的のためにふりむけるのであります。

即ち阿弥陀さまを信仰する人々は、自分たちの積んだ数多くの善根を一つにして人々の共同の目的である往生にふりむけるということとであります。これをいい換えれば、自分だけが往生を願うという心でなくして、多くの人々と一諸に往生したいと願う心であるという事になります。

更にこの心は、真実心と深く信ずる心を通してふりむけるのであります。従つて至誠心といえども深信といえども、自分だけがもつべき心ではありません。私も貴方も誰も彼もが持つていなくてはならぬ心であります。ここにおいて往生を願う心というのは、自分だけのことでなく、衆生とともに、人々と一諸

に往生したいと願う心であることがわかります。こうして初めて「他の一切の凡聖の身口意業に修する所の世出世の善根を随喜する」という句にある随喜という言葉の意味が明瞭になってくると思います。

話を最初にもどして「三心を具するものは必ず彼の国に生ず」という經典の一句は善導大師のご解釈によれば、自分だけが三心を具するのでなく、社会が三心を具し、社会が彼の国に生ずるという意味になるのではないでしょう。また善導大師は廻向を説明して「廻向というは、彼の国に生じおわつて還つて大悲を起し、生死に廻入して衆生を教化するをまた廻向と名づく」といわれ、極樂からこの世に向つて救いの手をのぼすことを廻向といっています。これまた衆生とともに往生したいと願う心であり同じように法然上人はと説かれています。

「廻向発願心というのは、往生して衆生を利益せんと思ふ心なり」

三心具足の名号

しかし三心という名すら知らぬ人々は救われないうのでしょうか。法然上人はこの点で更

に一步を進めて説かれました。

「たとひ三心の名をだにもしらぬ無智の者なれども、弥陀の誓を頼奉て、すこしも疑ふ心なくして、この名号を唱れば、この心が三心具足の心にてあるなり」

凡夫はいかに踏ん張つてみても凡夫であります。この凡夫を救うために阿弥陀さまは、法蔵菩薩の時に数知れぬ功德を積まれました。この功德がすべて名号の中に納められ、衆生に与えられているのです。次に二つの御法語をよく味つていただきたいと思ひます。「南無阿弥陀仏といふは、別したる事に思へからず。心には阿弥陀ほとけ、たすけ給へとおもひて、口には南無阿弥陀仏と唱ふるを、三心具足の名号と申すなり」

また

「人目をかざらずして、往生の業を相続すれば、自然に三心は具足する也。たとへば葦のしげき池に、十五夜の月のやどりたるは、よそにては月やどりたるとも見えねども、よくよくたちよりてみれば、あしまをわけてやどるなる。妄念のあしはしげけれど、三心の月はやどるなり」

無媒随録

須藤 隆仙

子供たちにたいへん人気のあるテレビ映画
ディズニー・ランドは、大人にもまた、いろ
いろと目を楽しませてくれる。

先日もある忠犬の物語りが放送された。デ
ィズニーの動物ものは独特の秀逸さをもつて
いる。私は犬でも猫でも、動物が大好きであ
るから、ディズニーの映画をみて、感激もし
いろいろと教えられもする。

犬でも猫でも飼ってみると、まるで人間と
寸分違わないような感じさえもつ。言葉をは
なすことはできないが、それでも飼主のいう
ことがよくわかり、驚くほど頭もきいて、と
きには人間以上の頭の廻りようである。

よくはわからぬが、進化論とかいう学問か
らいえば、生物はどんどん進化していくの

であるから、犬や猫や人も、やがては人間
と同じように、いやそれ以上に進化して、犬
が電気を使ったり、猫が宇宙を飛んだりする
時代がきてもよさそうである。

しかし、そんなことをいったら笑われるで
あろう。人間のほうはいふ文明が進歩した
が、犬や猫はそうでもないようである。室町
時代の犬や猫と、現在のそれとが、そうとう
に違うかという、そうではなさそうである
それどころか、鍋島猫騒動などというのがあ
って、返って昔の猫のほうが、人間たちを騒
がせていたようである。

バカげた話のようであるが、私はこんなこ
とを、ときとして真剣に考えてみる。いった
いどうして、いつまでも人間と犬や猫は区別
されているのであろうか。人間が犬や猫のよ
うな畜生としての存在から訣別したのは、い
つなのであろうか。そんなことを真剣に考え
てみるのである。

六道輪廻という言葉があるから、人間もう
っかりしていると畜生道へ帰るのであるが、
とにかく畜生から訣別して、仏性というもの
さえ具備し、人間からさらに仏になれる可

性さえもったのは、いつ頃からなのであろう
か。

仏性を開顕して仏になるという教えは、釈
尊によって開示せられたから、釈尊の時代に
人間が畜生と訣別したかというに、これはそ
うでもないのである。

それでは釈尊が、この畜生と人間との離別
を教えてくれているかという、無量寿経こ
そ、まさにそれであるまいかと思っているの
である。

十劫の昔に、法蔵菩薩が弘誓願を成就して
阿弥陀という本仏の身を顕示された、そのと
きの約束は四十八あるから四十八願という。
その第一の願は無三悪趣の願といって、わが
建立する浄土に、地獄餓鬼畜生があつたなら
ば阿弥陀の本身を開示しないであらう、とい
う誓願である。そこには、はっきりとした畜
生道との離別がある。畜生の世界を絶対に容
許せずして、そこにはじめて仏性をもった人
間の世界が出現した。それが念仏衆生を救う
如来の誓願成就であり、十劫の昔に畜生と訣
別したところから人間の歴史がはじまったの
であらう。

路頭に迷う婦人

——創価学会のこのごろ——

或る日、大学のカウンセリング研究所から相談に乗ってやつてもらいたいと一人の婦人がつれられてきた。幼ない小供を抱いた元氣そうな婦人である。

「本当に困りました。何とか助けて下さい」

この婦人は、如何にも困ったというような顔つきで、語りかけてきた。

「とも角、あと三日で創価学会をやめる期限が来るのですが、何だか恐ろしくて、どうしてよいか分らぬのです」

話は、こうであつた。何んでも、昔、女中をしていた家の婦人から、創価学会に入るように攻め抜かれ、ご恩も受けている事なので百日間だけ入ることを約束したのが、あと三日で期限がくるというのである。

「勿論、是非入りたいと思つて入つたのでないのです。毎月毎夜、入れかわり立ちかわり、学会の人がきて、もう家庭生活なんか

全滅なんです。私自身も気が狂いそうになつてしまいました。本当に根負けしてしまつたんです。全く学会の人って、ひどいものですね。」

かつて幾度か、そうした事を聞いていたが事のひとさに驚き入つた。信仰の自由はともかくとして、これでは、人権無視である。ていのよい軟禁のようなものである。

「買物せねばという、いや俺が買つてきてやるから、あの人のいう事を聞いておれとといった調子で、家の外にも出してくれないんです」

こんなにまで人を苦しめて折伏しなければならぬ程、学会の連中は、一体、何にせつばつまっているのでしょうか。罰論におののくこの婦人に、本当の仏教の在り方を説き、彼等のいう事など、信じなくてもよい事を詳しく編輯子は説いてやった。

「三日後には、おまんだらもしまつてしまいます。是非それに替るものを」と婦人がいうので、

「南無阿弥陀仏と、お名号でも書いてあげようか」

「いや、それだけは、まだ早いです。学会の人たちに、何されるか分かりませんから」というので、「自性清浄心」と書いて渡したら、おし頂いて帰つて行つた。果して、この婦人が、その後、どうしたかは知らないが哀れな庶民の姿がここにある。今更のように罪のない人々を毒している学会の行動が知られよう。

この頃、創価学会は、一人でも多く会員を獲得しようと、遮二無二やっているようである。外でもない衆議院の選挙が近づいてきたからである。已に彼等は、全国で三十二人の立候補予定者を発表して、選挙戦に入つた。聖教新聞は、ことあるごとに、これら立候補者の紹介と、宣伝に大童である。こうした時に、一票でも多く獲得する為には、一人でも多く会員を作る以外にない。その為には、手段をえらばず折伏をしているのである。縁故

をたどり、脅迫をし、闊論をふりかざし、人間の弱点に食い入る。その為に、苦しんでいる民衆が、どれ程いるかが、この一例でもよく分るのである。そうは言っても、世の中には、いろいろな人がいる。特に選挙ともなると、利権の為に動くものが多い。確かに、創価学会は、大きな票田を持っている。決して彼等の政策や、実践力が、力となっているのではないが、東京都知事選挙一つにしても、いかにも学会がイニシアチブを取っているように見える。自由党も、社会党も、ベコベコと頭をやたらに公明党に下げている。なんとしても、その票田が欲しいからである。公明党そのものの政治的価値などは、全然認めていないくせに、選挙となると、このさまである。これでは日本の政治がよくなる筈がない。

最近の創価学会は、如何にも文化活動を盛んにしているようであり、学生会員などをふやして、その思想を深めているように見える。学生会員十五万名達成と大きな宣伝もしている。外面的にみているだけでは、従来の現世利益宗教を脱皮して、新しい、彼等のいう「第三文明」造りをしているようである。しか

し、一步深くみてみると、空洞のような落とし穴に、民衆が落ち込んでいることに気がつく早い話が、彼等なりにでっちあげられ日蓮仏法なるものを称して、大生命哲学といい、世界最高の哲学と呼んでいるが、その背景となるべき思想は皆無で、終局するところ、おまんだらを信じて唱願すれば、生命は充実し、すべてがよい方に向うという事に過ぎない。どうして、他の宗教や、思想と比較してすぐれているかという点については、「日蓮大聖人がそういわれたから、そうだ」という、馬鹿々々しい根拠のみである。こうした事は、一向に進歩がない。こうした鵜呑みの盲信はやがて自己絶対の過信となり、自分だけは正しく、一切は邪なりとする過激論となる。そして、他の一切の邪性については、その詳しい理由をつきつめて、明らかにしようとするのである。

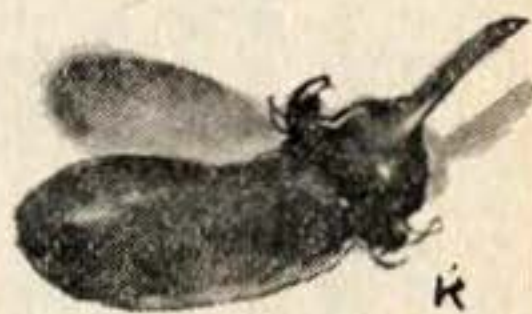
確かに、信仰は、批判からは生れてこない。愚鈍念仏とか、「だまされても、吾信ず」といった強いものが必要であろう。しかし、愚鈍たるためには、自己自身が本当に愚鈍なところの見きわめが必要であり、だまされてよい

と信ずる為には、相手が真に信ずるに足るのである事の見極めも必要である。そして自己の信ずるものに対しては絶対であつても他に対しては、謙虚にこれを見るだけの余裕と度量がなくてはならない。ただ無茶苦茶な信仰では、鰯の頭の信仰以下という事となろう。

さらに恐ろしいことは、学会の人々は、目に見、耳に聞く事は、学会のよい事だけしかない。最早や、他のものからは、一切目隠しされているわけである。これでは、悪いものも、よいと信じざるを得なくなってくる。

大生命哲学と言ったところで、批判の対象となるべき相手を見ない哲学であるから、是非の判断もしようがない有様である。これでは何処に、世界に冠たる哲学といい得る根拠があるのか、学会の人には分らない筈である。

とも角、大きくなればなる程に、これを引き締めて行かねばならぬ学会は、一面では進二無二な折伏で、会員の獲得をはかると共に一面では、盲信へ拍車をかけて、ともかく衆議員選挙には一人でも多くの議員を当選させて、その優位を保とうと、あせっているというのが、今日この頃の実態と言えそうである。



ご法事のとくに立てる、お塔婆は

どんな意味がありますか。

お塔婆の起源は仏塔です。お釈迦さまが亡くなりになったときに、多くの信者のかたがたが、火葬にしたご遺骨を分配して、それぞれの地方にもち帰り、遺骨を本体として、霊塔を建立し、お釈迦さまの生身と同じように礼拝供養したのが、塔婆のはじまりです。

お釈迦さまのご人格があまりにも偉大であられたので、滅後の信者が生前のお釈迦さまへの思慕の情やるせなく、それぞれの地方に塔を立てて供養しては、亡きお釈迦さまをしのぶと同時に自己をも、なぐさめ会ったのでしょう。

このようにしてみると、わたしたちが、ご法事のたびにお塔婆を立てる意味もおわかり

になることでしょう。塔婆に書かれた梵字や経文の一句は、各宗旨によってちがいはありますが、その根本は、みな同じなのです。

五輪の塔を形どった塔婆は、団、半月、三角、円、方の五つの形からなっており、これを人体でいうと団は頭、半月は首、三角は胸、円は腹、方は腰下ということになります。よく、梵字で、(キャ、カ、ラ、ヴ、ア)、と書かれ、その下に、戒名が書かれるのを見受けます。その梵字は、空、風、火、水、地と訳され、古代インドでは宇宙の生成変化を説明されるものでしたが、のち密教の教理と結ばれて、円満、完全、調和の意味をあらわしており、五輪の塔婆の思想がここから生まれたのです。

五輪の教えによりますと、塔婆そのものが仏さまのお姿とされております。

お塔婆を立てて供養するということは、お塔婆を通して、ご先祖さまのお姿を目のあたりに感じ、生前のお徳を偲のび、報恩のまこととを捧げることを意味します。

お墓参りについておしえてください。

お墓まいりをしたあとは、とてもよい気持ちになります。そのよろこびは、自分で思いたってすることにあるのでしょうか。他人から求められずに、自らすすんで物事をするというのが、仏教の菩薩(ぼさつ)さまの利他のころなのです。

お墓まいりしたからといって、いまは亡き両親なり、ご先祖さまがお礼をいうわけでもありません。しかし一心にこころをこめて合掌し、黙ってお香を焚き、お花を手向けて、ひたすら故人の冥福を祈るのです。

なにも言わず、語られなくとも、お墓まいりする人と故人との心と心とは、うつくしくも合掌の中に交流しているのです。仏教として、大切な理由は、お墓まいりしたいという心持の根源にこそ、ひそんでいるのです。

それは、亡き人びとから、生前うけた、かずかずのお世話であり、かつて亡き子どもに送ったはてしない自分の愛情なのです。決し義理だとか、恩だとか、という理屈はいものではなしに、なつかしさが忘れられないのです。お詣りしないと申訳けないというか、物足りないというのか、心が不安なのです。お

詣りしてしまふと、なにか、かりがすんだような気持ちになるのです。

お墓まいりの意味は、日本の大昔から流れてきた祖先を敬うことからきているのですが、そんなむずかしいことよりも、自分の今日こゝうやって生きている生命の大元、根元のことを考えるのは、どこの民族でも同じだと思ひます。まして、仏教では、ご先祖さまを生か

すのは、子孫の責任であるという、素直な思想が菩提（ぼだい）という名で世間につたえられ自分を生かしてくれた人びとを願ひながら、自分の生命を尊くかみしめていくという立派な仏教思想にまで発展してきたのです。お墓まいりが、自分の家の直接のご先祖さまなり、関係する人びとにお詣りするばかりでなく、仏教はいま一つ大きな人道的なことを

教えてくれております。それは「無縁墓」の供養をすることの功德です。今日亡き両親のお墓まいりにきて、香花をたむけることができて、わきを見れば荒れはてた墓標が目に入ることはありません。訪れる人も無縁のお墓にそつと香花をたむけて合掌する心、ゆかしい気持ちをはぐくむのも、お墓まいりを通しておこなわれるものとおもひます。

現代語訳 歎 仏 偈

——その四——

吉 田 定 久

う。無数という外ありません。

01 光明悉照

04 仏は皆その

偏此諸国

国に在り

如是精進

照らして教化

威神難量

進めらる

02 供養一切

02 この御仏に

斯等諸仏

供ぐより

不如求道

道を求めて

堅正不却

退ぞかじ

⑫ 此の沢山な御仏の供養もさる事ながら、

私としては求める道自分と他人の成仏の達成を急ぐべきだと思います、即ち今は我が道を堅実に、正確に進んで一歩も後退せずに一歩に越した事はないと考

⑬ ガンジス河（恒河）の砂の数は、計算し切れませんでしょう。御仏の世界（仏土）も

そうです。どんな性能の高い計量機を使っても、其の数を確実に知る事はできないでしょう。

えます。

03 譬如恒沙

04 砂の数の

諸仏世界

如くなる

復不可計

仏の世界

無数刹土

計り得ず

04 無数な仏土（仏国）は、無数な御仏が建

立していなさるのですが、その御仏は光明を以て、夫々の仏土を御照しになり、又、光明の裡で仏土の人達を教化なさるのでございます。そういう公明莊嚴、御教化の精進振り、威神の尊さは推量の限りではございません。

絵	連
話	続

みんなの法然さま

— 耳四郎の入信 —

高 橋 良 和

さしえ 小 林 健 造



法然上人のおしえが純一な信仰であるということは、当時のかずかずの各宗の名僧がひたしく上人に道を求めたことでもよくわかるので、そのなかでも名高いお坊さんたちは、当時栗田の青蓮院の住職であった慈鎮和尚（じちんかしょう）はもちろんのこと、その和尚から道を学んだ妙香院の良快僧正や、高野山の明遍僧都に、安居院（あくゐ）の聖覚法師と数えればきりが無いほどである。

それほどこの浄土のおしえはひろまったので、当時の人々の上にどれほどしあわせをあたえたかわからないのである。

然しこうした、僧侶が法然上人の偉大なおしえにあこがれて道を求めるのは当然のことであるが、ここに一つ珍らしい

極悪人（ごくあくにん）が上人によって救われたことがある。それをつづてみると、

その頃法然上人のところに大泥棒が入ったのである。

当時法然上人は、吉水の庵室においてになったある秋の夜のことである。この庵室の持仏堂に夜おそく侵入したのがこの大泥棒なのである。この大泥棒は河内の国の男で、天野の四郎という名で、別の名を耳四郎といわれ、当時近在に知られた悪い男だったのである。

この男が上人のところに押し入ったのであるから、事件は必ずや、面白く発展すると思われるだろうが、上人のところに侵入したこの耳四郎は、静かになえる上人のお念仏の声



にすっかり魂をゆすぶられたのである。

刀をつきつけて、今でいうなら「金を出せ」とおどし文句をならべるこの耳四郎を前にして、法然上人はおちつきはらっていたのである。

「あなたはひたすら仏にすがりなさい、それがあなたを救う道です。」

じゅんじゅんと説いたのである。

「いや、おれは泥棒が商売である。これがなければ生きてゆかれんのじゃ。」

「それはよくわかっている。然し人間は正しい行ないをしてひたすら仏にすがれば必ず罪が消えて救われるのだ。」
法然上人の声はきびしくとがっていたのである。

「それなら聞くけれど、おれのように人の財をとるところか人の生命を奪ったものはどうなるのだ、地獄行きだろう、それが救われるか、どうだ。」

そのとき上人の眼光はするどく光ったのである。そしていきわ声をつよくして、

「そうだ、心配しなくてもよい、悪人なればなるほど、救われるのである、悪人なればこそ御仏の慈悲のみ手がとどくのである。いわんや善人においてはなおさらである。早く仏にすがりなさい。すがりなさい。」

このことばに耳四郎は両手をついて、上人の前に首をたれたのである。

「お許ください。何もしらぬものとして、仏の救いのみ手などこの大泥棒の悪人にはとどかないものと思っていたのです。それが救われるのなら上人さま、早くお弟子にしてくださいまし。」

耳四郎のことばはすっかり過去の罪をあやまるようにくれたかと思うと、そのまま上体を上人の前にひれふして、ただ聞こえるのはむせび泣く声だけだったのである。

法然上人はやがてことばやさしくさとしたのである。

「泣けるだけ泣いたら、静かに聞くがよい。お前を救う道はただ一つ仏のみ名である。南無阿弥陀仏となえることだけである。さあ、わしがとなえるから小さな声でもよい。ついてとなえるのじゃ。」

上人はそこで、かすかに口びるをうごかしながら、ナムアミダブツ、ナムアミダブツと一声、二声となえると、それにつれて耳四郎も声を出してとなえたのである。法然上人と泥棒のとなえる念仏は持仏堂の障子をゆりうごかすような声となっていく時間もいく時間もつづいたのである。

「どうだ、わかってくれたか。」

「はっ、わかりました。」

「よかったなあ耳四郎。」

「上人さま今更耳四郎と申されてもこまります。もう過去の罪をさんげいたしました耳四郎でございます。何卒お弟子にしてくださいまして、よい名が欲しゅうございます。なるほど、それなら弟子にして名をつけてあげよう。え……—とそうじゃ教阿弥陀仏（きょうあみだぶつ）と名づけよう。どうじゃ。」

やさしい上人の声に耳四郎はまた涙しました。これで耳四郎は教阿弥陀仏と名を改めて上人の弟子になったのである。

こうして教阿弥陀仏は上人のそばにあって終始上人からおしえをうけたのであるが、晩年この教阿弥陀仏がたえず口にしたことは、

「わたしが死んだら極楽に生れることは決まっている、これは必ず上人のおしえを信じているからである。」

といつも自信をもって人に語っていたということであるがそれほど信仰の心ふかく、ひたすら念仏したのである。この教阿弥陀仏の臨終のときは正念たがわず、合掌みだれることなく、大きい声で念仏して終わったということである。

「なかなかしっかりした心がけの人である。ありがたいことだ。」

法然上人もこのことを聞いて、感心したということである

ご法語をいただく

虚仮といふは、ことさらに結構する輩なり好まずして、自然に虚仮ならんは、往生の障にあらず。念仏の信心を発たらん人は、必定して往生すべし。更に疑べからず。

(勅修御伝、第三十四)

あるとき、安楽房が法然上人にたずねました。善導大師のお言葉に「内に虚仮を懐くことを得ざれ」とあって、虚仮のもの、つまり心の内と行動が一致しないで偽りをなすものは往生できないとありますが、これはどのように心得たらよろしいでしょうか。

もともと善導大師の観経疏によれば、お念仏を称え往生を願うものは、身口意のすべてが真実でなければならぬと説くのであります。従って真実の反対の虚仮は最もさげなればならず、このような人がいかに熱心にお念仏を称えても、それは雑毒の善といって、決して往生できるものでないと説かれているのであります。

安楽房はお弟子さんたちの中でも、特に人望を集めていた人であり、特によく礼讃を誦していました。また女官たちが帰依したことから、さん訴されることになり、遂に六条川原で処刑されました。その時の態度が実に立派であったので、後の世にまで有名になった人でした。

この安楽房は、もちろん熱心な念仏行者であって、誰からも尊敬されていたのですが、省みて自分のことを考えると、どうもお念仏を称えていても妄念がでることがあるので悩まされていました。また熱心にお念仏を称えていても、つい怠け心が生じることのあるのも知っていました。このような反省から自分もあれ程強く戒められていた虚仮の内の一員ではあるまいかと疑うようになりました。そのため法然上人に直接質ねたのですが、これに対して答えられたお詞が、このご法語であります。

なる程、虚仮ということば厳しく誠められ虚仮の者は往生できないと断言されているわけですが、その意味するところは、人前を飾ろうとして故意に偽りの態度をなすこと、心

の内とは異った動作をすることにあります。

いわばわざわざ計画的に行う虚仮のことです。そうではなくて、凡人なるがために知らぬ間について虚仮の動作がでてしまうことがあります。この無意識のうちの虚仮は、往生のさわりにはなりません。要するに心から阿弥陀さまの願力を信じて、お念仏を申す人であるなら必ず往生できるのであります。このことを決して疑ってはなりません。善導大師がのこされたご解釈についてはよくよく考えて理解すべきであります。

法然上人は、このように答えられました。御伝には続いて次のように述べられています。「善導おはしまさざらましかば、われらいかでか、このたび生死を離べきやと。仰せられて、落涙し給間、聖光房、法力房、安楽房、みなともに、涙をおさへて、信心をましけり」法然上人は善導大師の信仰に導かれてお念仏の法門を開かれました。まさに大師なしには、法然教学もなかったことでしょう。このように思つて法然上人は、お弟子たちと一緒に涙にむせんだのでした。感動的な美しい一場面を描いたものであります。

「人生相談」

家庭における親と子の在り方

S夫人は、地域の読書会のリーダーをして
いる知性的で、カウンセリングを受けるに
しては安定した感じの中年婦人です。最近、あ
るカウンセリングに関する本を読んで、自分
も一度、分析を受けてみたいと思って来所し
たということです。初め彼女は、別に今のと
ころ自分には何も問題がないということをし
きりに繰り返すので、「自分のことでなくて
も気になることがありましたらどうぞ」と言
いますと、家庭のことでもよいのかと念を押
して話し初めました。

現在の家族は、夫と子供が二人で特に問題
はないのだが、近所に両親が住んでおり、母
の方は、S夫人とその妹にとっては継母であ
る。自分がまだ小学生の頃、事情があつて実
父母が離婚し、その後、この継母が来て自分
達を育ててくれたのだが、親子の間は、誰か
ら見ても申し分のない仲のよいものであつた

S夫人は、天性楽天的なのか、あまり
継母にわだかまりを持ったこともなく
割切つて成長して来た。継母も非常に
S夫人を信頼していたらしいという。

しかし、S夫人自身は実母のことを
忘れたわけではなく、最近年をとつて病気を
しているという便りを受け、父から禁止され
ていたにも拘らず、実母に会いに行つてしま
つた。自分としては別に他意はないし、継母
を大切にする気持も変わらず、ただ一人で病
気をしている実母にこのまま会わないのでは
あまりに淋しいと思つたまでである。しかし
このことが実家に知れるや、あれほど賢明で
一度もとり乱したことの無い継母が非常に感
情的となり、父も立腹のあまりS夫人を勘当
するなどと言ひ出したのである。S夫人は、
現在の家庭で充分満足な生活をしているし、
勘当されたつて自分は悪いことをしているわ
けではないし、かえつてさっぱりしているく
らいだから少しもさしつかえないのだが、逆
に心細い思いをするのは年老いた父母の方な
ので、どうしたら自分の気持を誤解せずいき
いてもらえるのか、途方にくれてしまうとい

うことでした。

S夫人は、こんなにこたこた厄介な問題を
起されるのは真平だから、自分はいっそのこ
と実家と縁を切つた方が気楽だなどと言いな
がら、やはり年老いた父母が心配らしく、妹
のことも含めて何かと実家のことを相談する
のでした。ところが、幼少時に実母と別れて
しまったため、実母をよく憶えていない妹が
継母の味方をして何かとS夫人の立場を悪く
するようなことを継母に言いつけ、ますます
継母の気持を傷つけてしまったようです。
S夫人は妹に対する腹立たしい気持を訴えな
がらも、何故妹がそんなことをするのかと考
え、かえつて自分を不幸にすることではない
かと妹を説得したりしたのですが、逆に妹か
らもうらみごとを言われたりして、結局S夫
人の気持は理解されないまま、実家と対立状
態を続けることになってしまいました。

(次号へ続く)

大正大学カウンセリング研究所

口 和子 担当

いのちながく、けがれなく

調和して生きる

はすの花

あさまだきころ、はすの花は、泥土の池に、けがれなき清楚な白きすがたをあらわし、音をたてて、花開くという。



蓮の花というと、なにか縁起のわるい死に花とおもっている人が多い。しかし、よく考えてみると、蓮の花ほど縁起のよい花はない。蓮の花は、いろいろの徳をもっている。

まず、蓮の花のすみかは、泥沼池である。きよらかな池には育たない。にもかかわらず、沼池に身をおきながら、花自身は、いつもけがれなく、清楚をたもっている。

つぎに、ふつうの草木のように、一本の幹から枝葉がでて、花を咲かせるというのではなく、蓮は、花は花、葉は葉というように、根元を別々にしている。そして、花の色も、茎や葉の色も、それぞれ種々の色あいをもっている。しかし、ばらばらにみえる蓮の花も、泥沼池のなかで、こんせんと一体となり、調和をとって、ふくいくたる香りを放っている。

さらに、蓮はながいいのちをとどめている。一千年、三千年、五千年……と悠久さをほこっている。まだまだ、蓮の花

はいくたの徳をもっているが、二、三をかぞえてみても、み仏の国にふさわしい花は、蓮の花というべきであろう。

蓮の花は、いまの世に生きるわたしたちに、いくたの道すじをおしえる。貧すれば貪する、といわれるが、逆に物のみが豊かになったからとて、人間社会は必ずしも住みよくはならない。たとえ、泥沼のようなけがれ多きなかにあっても、それにそまらず、なお、豊かな人間性を失わず、明日に向って、正しく、つよく生きる人間のたましいを養うことが大切であろう。現代人は物によって、心がむしばまれている。そのため、親は子をいつくしみ、子が親を慕う、という家庭の問題にしても、また、社会の万般にわたる人間関係においてそこに、なんらのつながりと、交流がみられない。

お互のかよい合うなかに、調和がたもたれ、力づよい進みがある。そのすすみの中に、いのちが育っていくのである。

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和四十一年八月二十五日印刷 昭和四十一年九月一日発行

浄土 第三十二卷 第九号

定価金六拾円 (送料六円)

安居香山・中村璋八著
緯書の基礎的研究

本文 480P 英文 9P
クロス上製 函入
価 3000円 ㊦ 200円

◎中国古代の呪術的予言と、これをめぐる政治、社会、宗教の
からみあいの分析。

〔内 容〕

思想編	安居香山
第一章 緯書思想研究における問題の所在	第六章 緯書における地理的世界観
第二章 図讖の形成とその延用	第七章 緯書における大九州説
第三章 王莽と符命	第八章 劉漢関係緯書の五徳終始説
第四章 「孔丘秘経」考	第九章 漢魏六朝時代における図讖と仏教
第五章 緯書における生成論	
資料編	中村 璋八
第一章 緯書資料における問題の所在	
第二章 各緯における諸問題	

発行所 漢魏文化研究所



ご希望の方は、本会にお申し込み願います。

「浄土」講読規定	
一部 定価 金六十円	
(送料 六円)	
会費一力年 金七二〇円	
(送料 不要)	
浄土	九月号
昭和十年五月二日 第三種郵便物認可 昭和四十一年八月二十五日 印刷 昭和四十一年九月一日 発行	
定価 六十円	
編集人 宮林 昭彦	
発行人 佐藤 密雄	
印刷人 関 二三男	
印刷所 新光社印刷株式 会社	
発行所 法然上人鑽仰会	
東京都千代田区飯田町一ノ二二 電話東京二六二局五九四四番 振替東京八二一八七番	